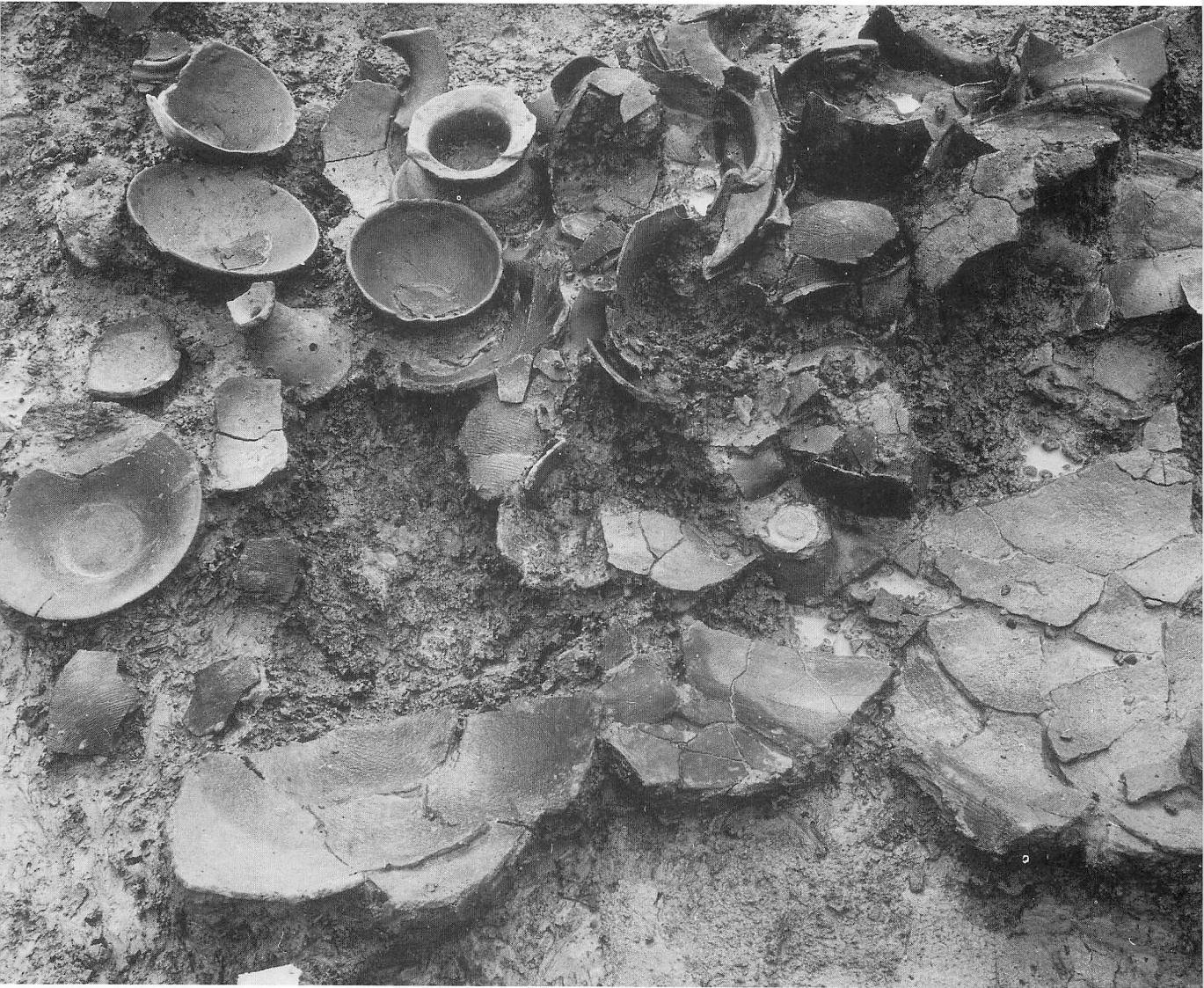


# 村前東 A 遺跡概報 1

一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査（Ⅰ区・Ⅱ区）



1994. 3

山梨県教育委員会  
建設省甲府工事事務所

# 序

村前東A遺跡は、現在の山梨県中巨摩郡榑形町と若草町との境界地域に広がる遺跡で、甲府盆地西部の御勅使川の扇状地扇端部に位置しております。

本遺跡の発掘調査は、一般国道52号（甲西道路）改築工事にともない、これまで1990年と1993年度の2回にわたって実施され、来年度以降も継続が予定されております。今年度の調査は、榑形町町道10号線を境に南側をⅠ区、北側をⅡ区とし、両地区並行して行なわれました。

Ⅰ区では、上下2面の遺構面が確認され、上面からは平安時代の竪穴住居跡12軒、溝、畠状遺構、下面からは古墳時代前期のピット群、焼土跡、溝等が検出されました。Ⅱ区では、3面の遺構面が確認され、最上面からは中・近世以降の溝、第2面からは平安時代の竪穴住居跡9軒、溝、柵列状の土坑群、第3面からは弥生時代後期の住居跡5軒が発見されております。

平安時代の住居跡は、今年度調査区内では散在的な広がりを見せておりますが、居住区はさらに調査区の東西に広く展開しているものと推定され、次年度以降の調査とあわせて集落の全体像が解明されると予想されます。弥生時代後期中頃から古墳時代初頭の遺構は、現地表下2～3mの地点に確認され、旧河道や微高地といった当時の地形がそのまま厚い土砂の下に埋もれていることが判明しました。この面からは、甕、壺、高坏、器台など当時の人々が使用した日常品が大量に出土し、甲斐の古墳出現前後の生活様式を追求する上でも、今後欠くことのできない資料と考えられます。

本書は、1993年度調査されたⅠ・Ⅱ両地区の概要をまとめたものであります。この概報が多くの方々に利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々のご指導、ご協力を賜った関係各位、並びに直接調査に参加された方々に厚く御礼を申し上げます。

1994年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

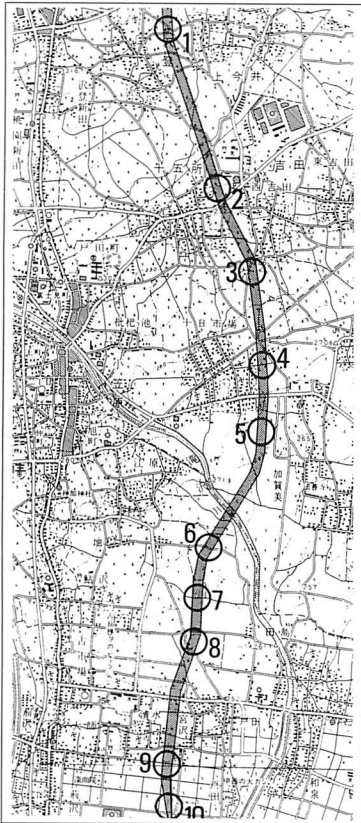
## 例言

## 目次

1. 遺跡と周辺の環境
2. 調査経過
3. 調査区の設定
4. Ⅰ区の遺構と遺物
5. Ⅱ区の遺構と遺物

1. 本書は、1993（平成5）年度に実施した山梨県中巨摩郡榑形町、若草町地内に所在する村前東A遺跡（むらまえひがしAいせき）の発掘調査の概報である。
2. 調査は、一般国道52号（甲西道路）改築工事にともなって、建設省から山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、Ⅰ区を中山誠二・小林公治、Ⅱ区を三田村美彦・佐野和規が担当した。
4. 本書の執筆・編集は、上記の4名が担当し、文責は文末に明記した。
5. 本報告書に関わる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

# 1. 遺跡と周辺の環境



第1図 甲西道路上の遺跡群

村前東A遺跡は甲府盆地西部に位置し、現在の行政区分では山梨県中巨摩郡檜形町十五所字村前東から若草町十日市場にかけて広がりをもつ遺跡である。この地域は南アルプスから盆地へ流れてた御勅使川によって形成された扇状地扇端部にあたり、標高約280mをはかる。

両町の遺跡は、近年行なわれた遺跡詳細分布調査や町史作成のための調査によって、かなり精度の高い分布状況が把握されている。その数は、檜形町で239ヶ所、若草町で86ヶ所に及んでいる。

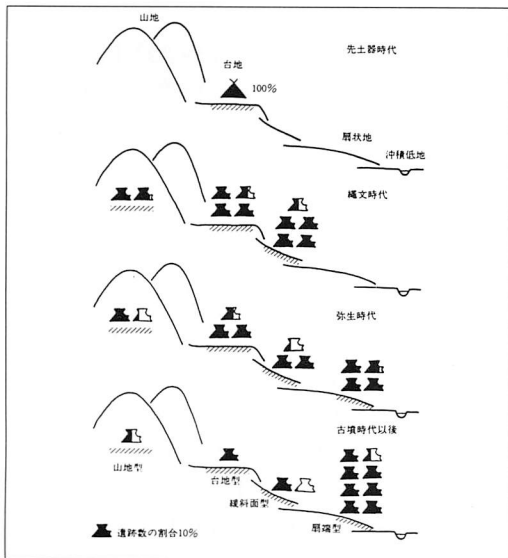
これらの調査によれば、旧石器から縄文時代にかけての遺跡は、市之瀬台地などの台地上や、台地と扇状地の境界にあたる緩斜面に多く分布する傾向をもち、時代が新しくなるにつれ盆地の低部への開発、居住傾向が強くなる。

本遺跡の立地は、御勅使川の古期扇状地とよばれる比較的古い時期に形成された扇状地上にあたるため、付近にわずかながら縄文時代の遺跡の存在が確認されているが、扇状地扇中央部から扇端部、さらに氾濫原とされるような沖積低地への本格的な開発は弥生時代以降であることが遺跡分布の上からも明らかにされている。(第2図 保坂康夫「原始・古代の遺跡」『若草町誌』1990)。

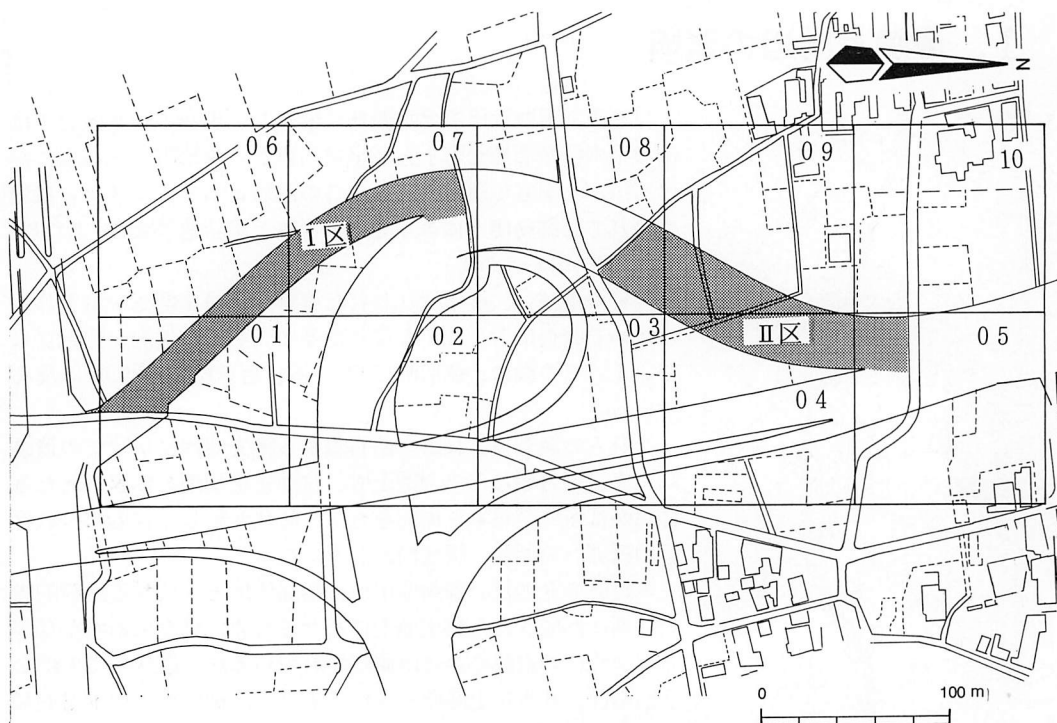
甲西道路に関わる遺跡は、1989年、1990年の試掘調査によって10ヶ所が確認され、本調査の必要性が判断された。それ以後、甲西町大師東丹保遺跡Ⅰ・Ⅱ区、中川田遺跡、油田遺跡、向河原遺跡、若草町二本柳遺跡、新居道下遺跡、檜形町村前東A遺跡Ⅰ・Ⅱ区、白根町七ツ打C遺跡の調査が実施されている。

これらの遺跡群は、いずれも扇状地扇中央部から後背湿地にのぞむ遺跡で、微地形の上では比較的高燥な微高地上に展開する居住域と、埋没旧河道や低湿地を利用した水田などの生産域に分類することができる。

- 1 七ツ打C遺跡 (近世)
- 2 十五所遺跡 (古墳)
- 3 村前東A遺跡 (弥生、古墳、平安、中近世)
- 4 新居道下遺跡 (弥生、古墳、奈良、平安)
- 5 二本柳遺跡 (弥生、古墳、平安、中近世)
- 6 向河原遺跡 (弥生、中近世)
- 7 油田遺跡 (弥生、古墳、奈良、平安)
- 8 中川田遺跡 (弥生?、平安、近世)
- 9 大師東丹保遺跡 (弥生、古墳、平安、中近世)
- 10 宮沢中村遺跡 (近世)



第2図 峡西地方遺跡群の立地と時代変化 (保坂康夫 1990)



第3図 調査区的位置図

## 2. 調査経過

本遺跡は、1990年に行った甲西道路改築事業にともなう試掘調査において遺跡の範囲がほぼ確定され、同年畑地灌漑用パイプ移設工事に先立って第1次調査が行われている。

今年度は第2次調査として、中部横断道インターチェンジを西側に迂回する甲西道路本線部分の調査を行った。調査区は、楕形町道10号線を境に南をI区、北をII区としたが、両地区の中間地帯に一部土地未買収部分が存在したため、未調査部分を残している。

調査は、1993年4月12日より開始し、同年12月27日に終了した。

## 3. 調査区の設定

調査区は、今後予想されるインターチェンジ部分の調査地域の範囲を考慮にいれ、南北500m、東西200mの範囲を一辺100mの方眼に区切り、01区から10区の大グリッドを設定した(第3図)。さらに、大グリッド内部を東西、南北に20分割し、一辺5mの小グリッドとした。小グリッド名は、東西方向にローマ字のA~T、南北方向に数字の1~20の番号を与え表わすこととした(第3~5図)。

グリッドの名称は、01の大グリッド南東コーナーを起点とし、頭2桁を大グリッド名、下3桁を小グリッド名を表わすものとする。小グリッドは、東から西へ向かってA→T、南から北に向かって1→20とする。したがって、02B10は、大グリッド02区の南東起点から西へ2番目、北へ10番目の小グリッドを示す。

なお、大グリッドの起点となる点は、国土座標系の $X = -43, 180.000$   $Y = -1,520.000$ に位置している。また、北位はグリッドの南北ラインが真北を表わし、磁北からは6度東方向にずれる。



## 4. I区の遺構と遺物

### 1) 概要

I区では、調査区北端部を8mほど掘り下げ、土層観察を行った。その結果、御勅使川を中心とする河川の氾濫によって形成された砂礫層が現地表下に厚く堆積し、洪水と洪水の間の比較的安定した時期の地表面が砂礫層の間に数面確認された。

このうち、人為遺物をともなう文化層は第1面の平安時代面と第2面の古墳時代面の大きく2層に分かれる。

第1面の平安時代面は現地表下約1mに存在し、竪穴住居址12軒、溝数条、畷状遺構2ヶ所などが検出された。第2面の古墳時代前期面は第1面の約1m～1.5m下に存在し、上部の砂礫層によって当時の微高地と埋没旧河道が覆われていた。遺物は、調査区のほぼ全面で出土するものの、検出遺構は微高地上に焼土址11ヶ所、ピット群、埋没旧河道の凹地内に土器集中部分が検出されているのみである。

### 2) 古墳時代の遺構と遺物

#### (1) 遺構 (第4図. Pl. 1～4)

##### 埋没旧河道と微高地

I区では大グリッド01区の北西部から06区北東部(01区Q～T.8～18グリッド、06区A～B.12～18グリッド)にかけて幅10m程の埋没旧河道が検出され、これを挟む南北地域が微高地状の地形を呈する。

埋没旧河道は、弥生時代後期以前に形成された凹地地形によって基底面が形成されるが、それ以降の洪水時に河道化し、砂礫を中心とした水成堆積物によって埋没していったものと推定される。

断面観察では、旧河道がある程度埋没した段階に人為的な再掘削または再利用がなされ、古墳時代前期の遺物が大量に投棄されたものと判断される。したがって、現段階ではこの旧河道部分を第6号溝(SD006)とよび、人為的な溝として理解しておきたい。

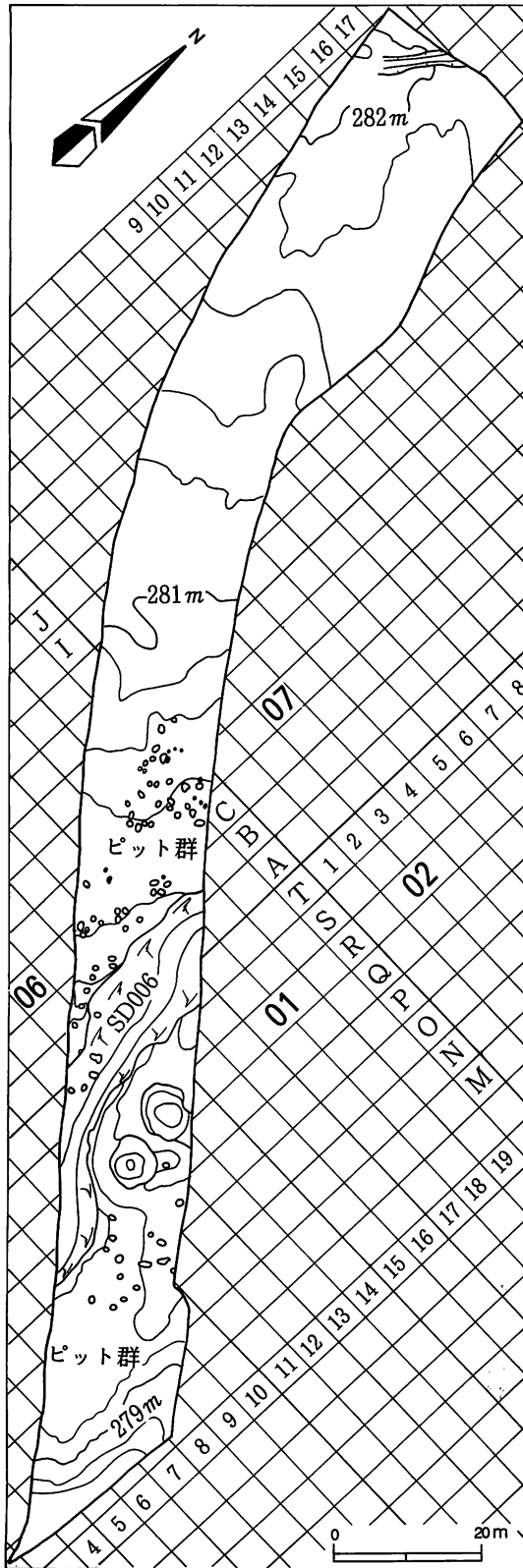
01区T12～14グリッドに位置する溝内には、古墳時代前期の甕、大型甕、壺、高坏、器台形土器などが集中して検出されており(Pl. 3)、微高地上に発見された焼土址と関連した祭祀施設の一つとも推定される。

##### ピット群 (Pl. 1)

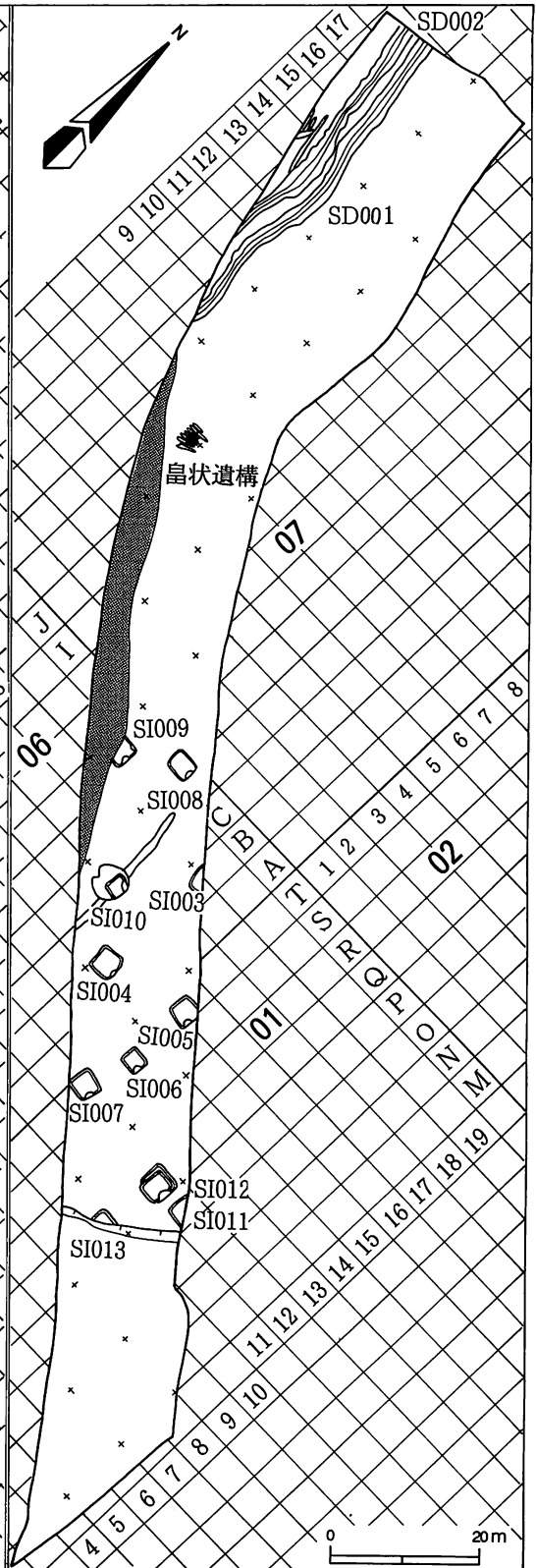
I区調査区の南側半分にピットおよび土坑が集中する傾向を持つ。検出されたピット群は直径50cm程の円形ないし不整形、土坑は長軸1m前後の楕円形をとるものがほとんどで、掘込みが遺構確認面から10～20cm程の浅いものが多い。ピットの配置は、散在的な在り方を示し、特に掘立柱建物址や柵列等の明確な人為的遺構と判断されるものはない。

##### 焼土址

SD006の北側にあたる06区D～E.17～20グリッドに11基検出された。周囲のピットとの関連は薄く、とくに平地式住居等の施設とも考え難いため、現段階では屋外のたき火施設と判断している。位置的にはSD006の北側にさほど距離をおかず集中しているため、先述した溝内の土器集中施設などと関連して理解される可能性が高い。



第4図 I区古墳時代前期の遺構配置図  
および等高線図 (1/1000)



第5図 I区平安時代の遺構配置図  
(1/1000)

## (2) 遺物

調査区全体を覆う黒色の土壌層中より出土し、遺構が多いI区南半地域に集中する傾向が強い。出土遺物は土器がほとんどを占めるが、わずかながら石器、鉄製品を伴っている。

土器は整理作業中のため全体の内容に不明な点があるが、古墳時代前期の甕、壺、高坏、器台形土器など小型丸底土器を除くほとんどの器種がそろそろ。

甕は、西部東海系とされるS字状口縁台付甕（以下、S字甕と呼ぶ）を主体とし、在地系甕や北陸系の甕などが共伴する。特にS字甕は前回調査した中にA類とされる比較的古いS字甕も得られており、盆地内でのS字甕の出現やそれ以降の変遷を捉える上で重要である。壺においてもパレス壺に系譜を持つ東海系の壺なども出土している。また、高坏、小型器台等も東海西部地方に起源が求められるものであり、東海系の土器の移動やその背景となる人間の移動を探る上で興味深い土器群である。

石器としては、先端部に打撃のための平坦面を持つ敲石や磨石状の石器がわずかに認められた。鉄製品は小型品の一部分と考えられるが、何の製品であるかは判断できない。（中山誠二）



PI. 1 ピット群（古墳時代前期）



PI. 2 第6号溝発掘風景



PI. 3 第6号溝内土器集中



PI. 4 第6号溝全景



PI. 5 平安時代の住居址群



PI. 6 第7号住居址

### 3) 平安時代の遺構と遺物

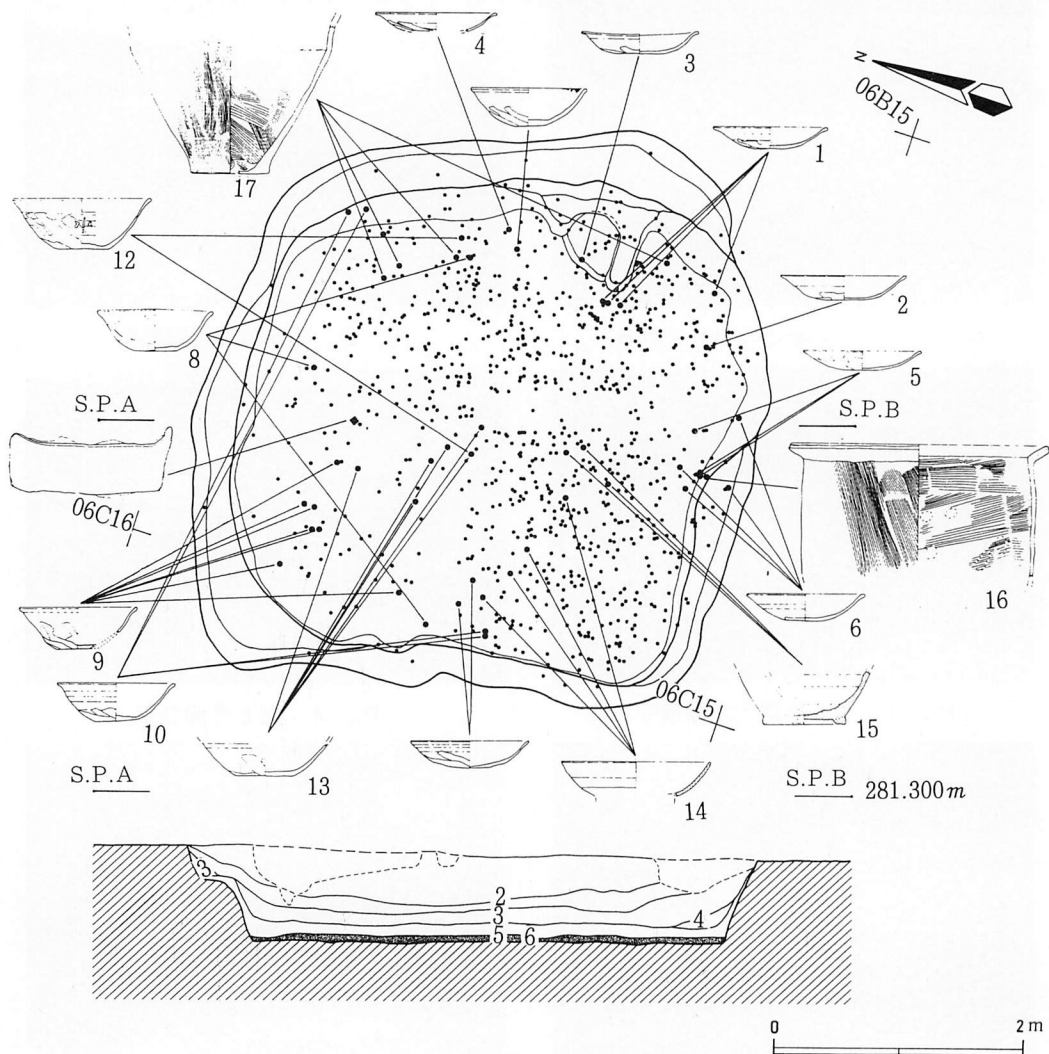
#### (1) 住居址 (第6・7図)

12軒の平安時代竪穴住居址のうち、ここでは特に第4号住居址 (S I 004) を取り上げその概要をみてみることにしたい。

この住居址は調査区の南西寄りから検出されている。四辺は他の住居址と同様、方位とほぼ向きを揃え、カマドは東壁やや南寄りに造られている。当初、上位面で確認した平面プランはいびつな形状であったが、掘り下げた結果、最終的には各辺の長さが4 mほどの不整形な形状となった。こうした確認プランとの違いが生じた原因は現在のところ不明であるが、地山が砂質で崩れやすいことや、水の影響を強く受けた埋没環境などによることが可能性として予想される。

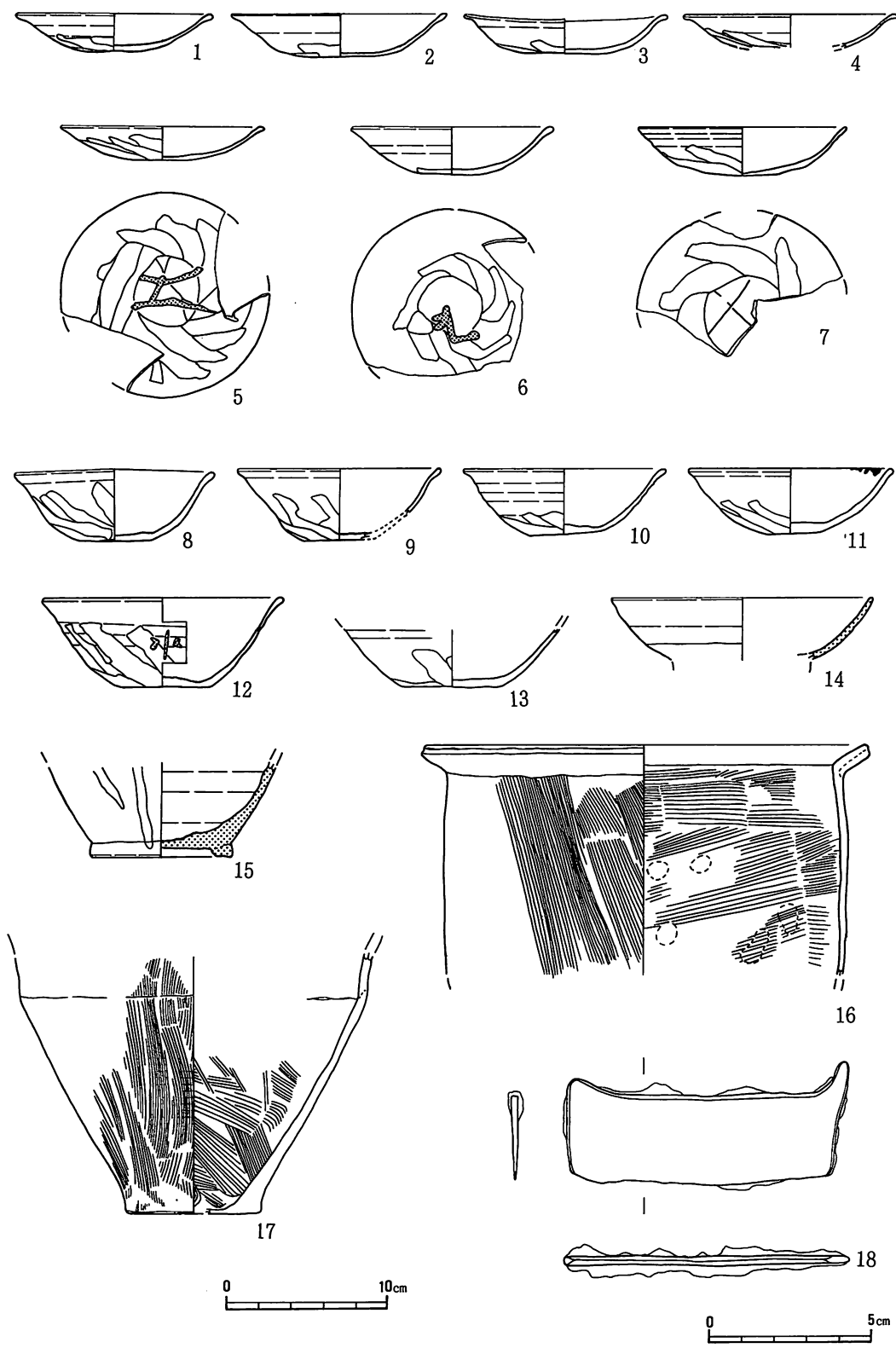
住居内の施設としてはカマドの他には確認できず、また床面の硬化も全体に顕著ではなかった。カマドはシルト質の黒褐色土などによって造られており、加熱による赤化度合いはさほど強くないものの、全体に遺存状況は良好であった。

遺物出土量は他の住居址にくらべても多く約850点を数える。しかし、覆土上位からは小円礫を数十点集めた石敷遺構が検出されており、また遺物出土レベルの観察でも2層以上に集中が分離さ



第6図 第4号住居址平断面図および遺物出土状況 (1/60)





第7図 第4号住居址出土遺物 (1/4・1/2)

れることから、これら遺物のすべてが一度の機会に埋没したものとは考えにくい状況である。また平面的には、南寄りにやや多く集まる傾向が見受けられる。出土品のほとんどは土師器であり、須恵器・灰釉陶器や鉄製品などはごく少ない。

こうした出土遺物のうち、ここで実測・図示し得たのは18点であり、器種は皿・坏・碗・甕および芋引金である。土器類の中でも供膳器は、全体に形態・法量ともに揃っており、また技術的にはロクロ整形で体部外面に上位から下位への斜めヘラケズリが為されている。内面に暗文は施されない。また4点の土師器には外面に墨書もしくは刻書が確認できる(5~7・12)。これらの内容は墨書が「工」・「九」・「水」、刻書は「×」と観察できるが、「水」と体部外面に書かれた碗(12)は用途を記したものと推測され興味深い資料である。その他、灯明用として使用された坏(11)が1点ある。

この他、注目される出土品には住居西寄りの床面やや上から出土した芋引金(18)がある。この種の鉄製品は現在までのところ県内では北巨摩方面で4点出土しているにすぎず、本例が5点目であると共に盆地内では初の出土となる。

## (2) その他の遺構 (Pl. 7・8)

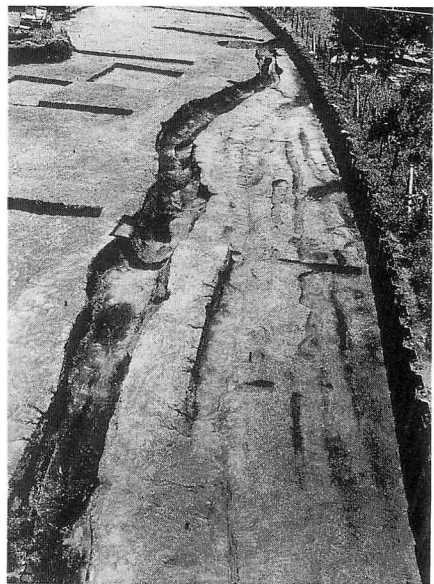
調査区の南半部に住居址群が集中するのに対して、北半からは遺構はほとんど確認できず、わずかに溝と畠状遺構が検出されたに過ぎない。以下これらの遺構についても簡略に説明する。

### 溝 (Pl. 7)

調査範囲の北西隅から2条検出されているが、確認層位としては住居址群よりは若干上位であり、時期的にはやや遅れて形成されたと考えられる。この溝は東側が幅約1~2m、深さ約1m前後で、西側は幅は同様であるが深さはやや浅い。両者の溝は若干蛇行しながら2本ほぼ平行に走っている。覆土にはいずれも砂もしくは礫層が充満しており、流水の形跡も窺われることから、これらの溝は掘り込まれた後、洪水などの原因によって急激に埋没したことが明らかであるが、どのような機能を持っていたのかは明らかにできない。遺物は土師器片がごく少量出土したのみである。

### 畠状遺構 (Pl. 7・8)

畠状遺構としたものは畝間溝に類似する浅い溝が数条平行に走るものであり、2ヶ所で確認されている。1ヶ所は上記した溝の西にやや長く確認されるもので、切り合い関係から溝よりは古いと判断できる。もう1ヶ所は調査区やや中央寄りで確認され、7条の浅い溝を長さ3mほどにわたって確認することができた。これらの遺構が果たして畠と認定できるのかどうかについては、現在花粉やプラント・オパール分析を実施中であり、そうした結果を踏まえて今後さらに検討する必要がある。(小林公治)



Pl. 7 第1・2号溝と畠状遺構

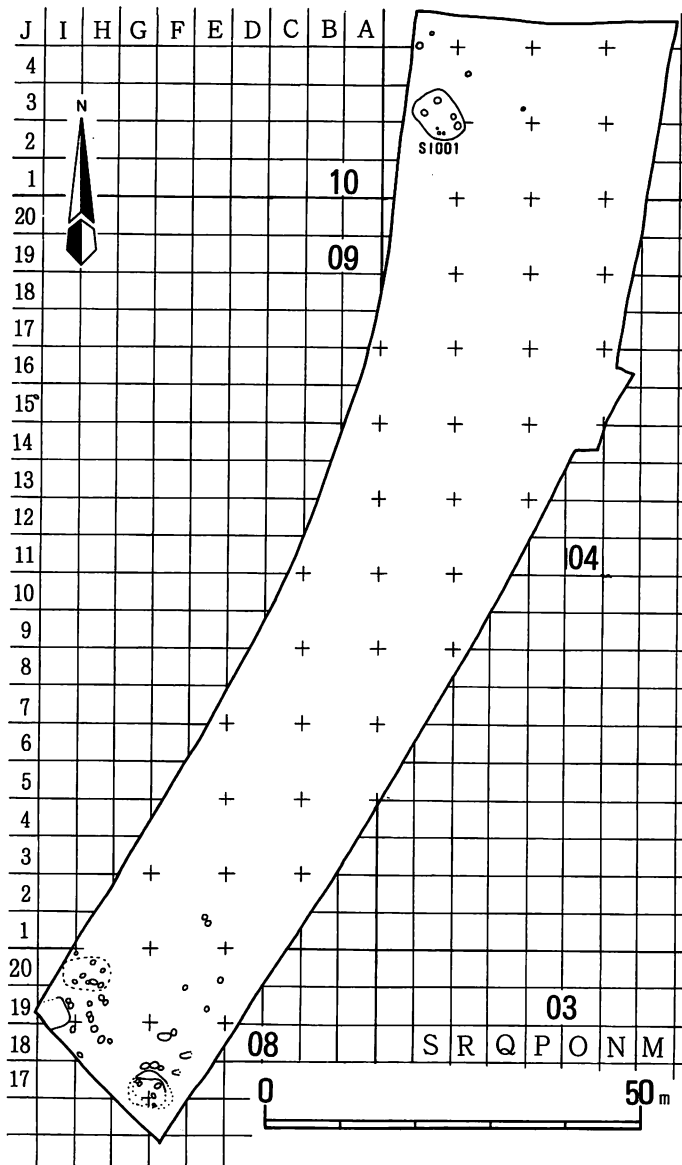


Pl. 8 畠状遺構

## 5. II 区の遺構と遺物

### 1) 概 要

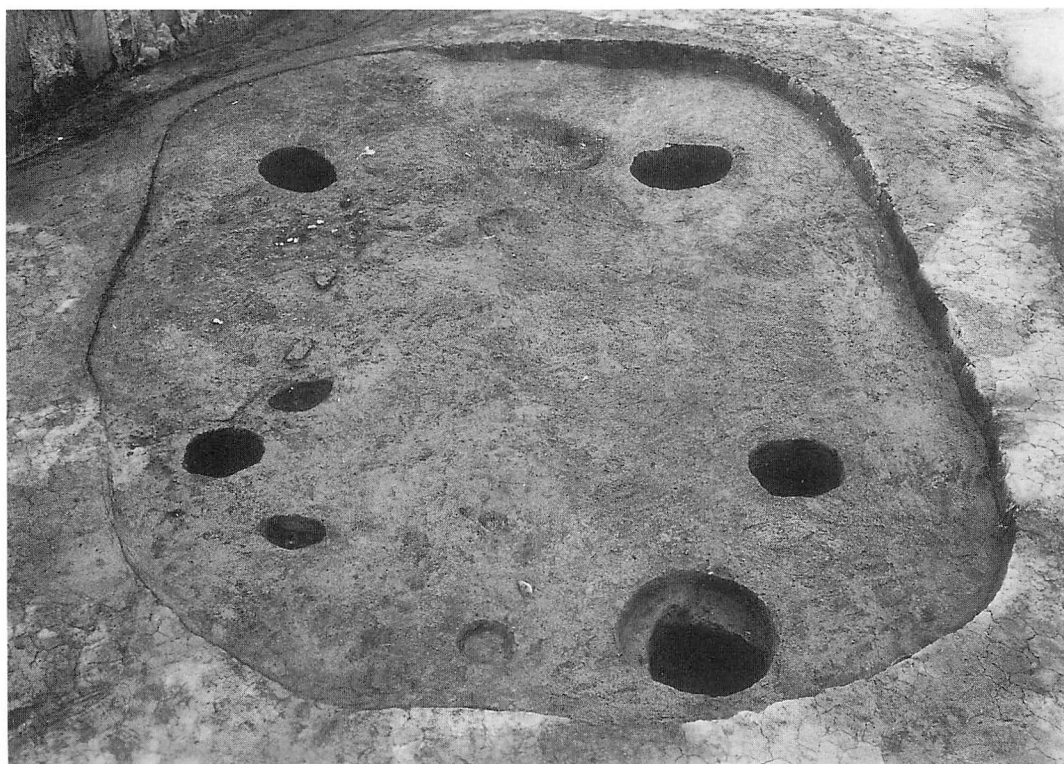
II 区では調査区南側で中・近世以降（第1面）・平安時代（第2面）・弥生時代（第3面）の3枚の文化層が間層を挟み層位的に確認されているが、北側ではほぼ同一面で各時代の遺構が確認されている。これは遺跡の所在する旧地形が、北から南に向かって緩やかに傾斜しているため、洪水堆積物が南側に厚く、北側に薄く堆積したことに起因すると考えられる（調査区の南端と北端で検出された弥生時代の遺構面の確認レベル差は約3m）。また調査区北端と中央の広い範囲で、砂礫層の堆積が面的に捉えられ、本遺跡が御勅使川の氾濫による複雑な水成堆積の影響下に立地していることが判る。



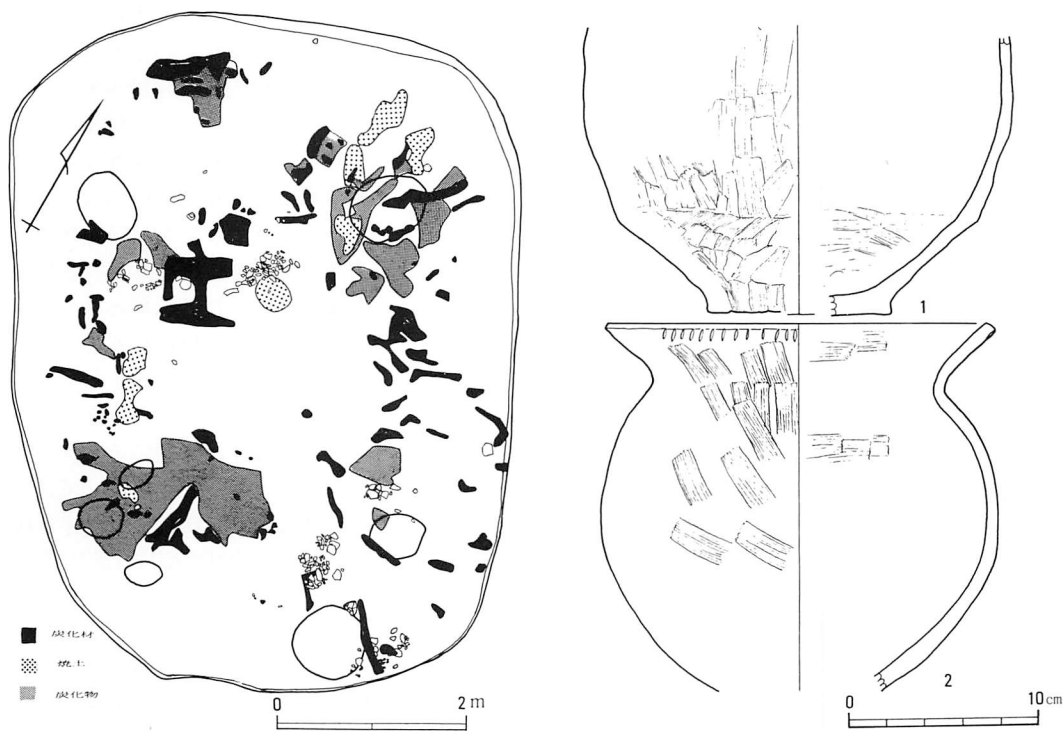
第8図 II 区弥生時代（第3面）遺構配置図（1/1000）

### 2) 弥生時代の遺構と遺物

第3面では弥生時代後期の住居址5軒と土坑が検出された（第8図）。遺構は調査区の南北端で検出され、中央付近は空白となる。調査区北側では住居址1軒（第1号住居址）と土坑が検出されている。第1号住居址（S I 001・第9図）は08区H・G-18グリッドで確認された。7m×6mの小判形を呈す大形もので火災を受けており、壺や甕などの土器とともに多量の炭化物・炭化材が出土した（第9図）。柱穴は6本確認されているが、掘り方や深度などを考慮すると当該期に一般的な4本柱支柱穴となろう。炉址は住居址中央よりやや北側で確認され、床を若干掘りこんだ地床炉となる。炉の北側からは台付になると思われる甕（第9図2）が出土した。また南東のコーナーには直径80cm深さ50cmを測り、北側にテラスをもつ円形の土坑が検出され、坑底から約20cm浮いた状態で胴下半に稜をもつ、壺の底部破片（第9図1）が出土している。これら出土した土器から本住居址は後期中葉に比定されよう。調査区南側では、4軒の住居址と土坑が検出された。住居址は覆土と地山の色調が極めて近似しており、プラン確認が難

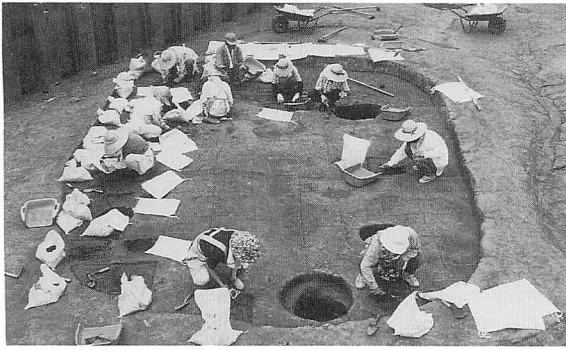


Pl. 9 第1号住居址完掘

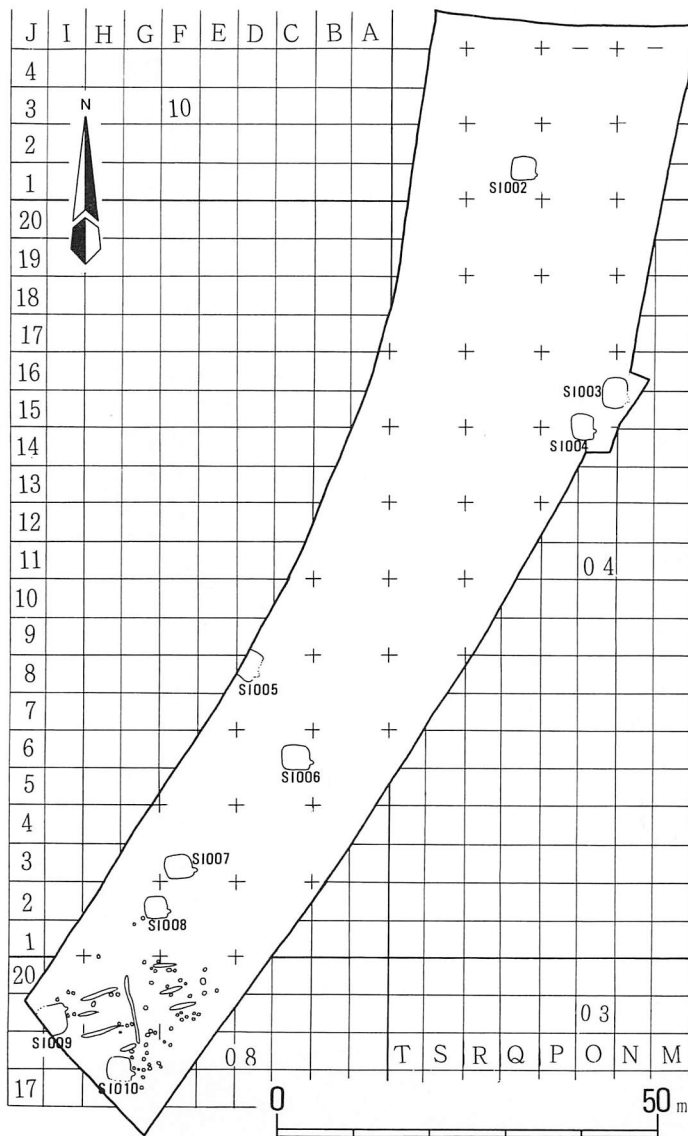


第9図 第1号住居址遺物出土状況(1/80)及び出土土器(1/4)





Pl. 10 第1号住居址調査風景



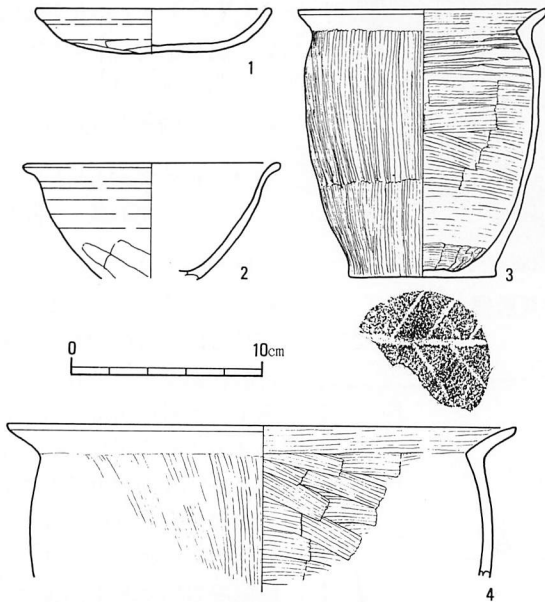
第10図 平安時代(第2面)遺構配置図(1/1000)

航した。炉址・周溝・柱穴等が確認された段階でプランを推定復元したものもあり、不明瞭な点が多い。調査区南側の住居址で出土した遺物は壺や甕などの土器が主体となるが個体となるものは少ない。

### 3) 平安時代の遺構と遺物

第2面では平安時代の住居址9軒の他、溝・土坑等が検出された(第10図)。住居址は調査区全域に散在するように分布しているが、第7・8号住居址(SI007・8)第3・4号住居址(SI003・4)のように2棟が近接して構築されるものがある(Pl. 15)。両者は東西方向に軸を合わせ、約3mの間隔をおいて若干前後するかたちで検出された。第7号住居址(Pl. 12)は09区E・F-3グリットで検出された。長軸3.4m、短軸2.8mを測る長方形を呈し、カマドは東壁の中央よりやや南側に構築され北側の袖部周辺から甲斐型の小型甕及び甕(第11図3・4)が出土している。柱穴・周溝などは検出されていない。第8号住居址(Pl. 14)は09区G・F-2グリットで確認された。長軸、短軸ともに約3mを測り、ほぼ正方形のプランとなる。カマドは第7号住居址と同様、東壁の中央よりやや南側に構築されている。北壁から東・西壁の北半分にかけて周溝が巡るほか、直径約80cmを測る円形の土坑が検出された。2軒の住居址の覆土は黒褐色を呈し、1cm前後の小礫を混入する点で共通する。また、調査区南側では溝と土坑群が検出されている(Pl. 11)。溝はいずれも幅50cm、深さ20cm前後を測る小規模なものだが、近接して確認された第9・10号住居址(SI009・10)と軸を合わせて、東

西・南北に直行するように検出されている。土坑群は直径20～40cmを測るものが主体的でその配列から柵列と思われるものが認められ、前述した溝も含め住居址との関連が注目される。これら平安



第11図 II区平安時代出土土器 (1/4)

時代に比定される遺構からは土師器坏 (第11図2、第9号住居址出土)、皿 (第11図1、第2号住居址出土)、甕 (第11図3・4、第7号住居址出土)のほか甗、須恵器坏、甕等の土器類及び鉄製品が出土している。また、カマドに堆積した土を採取し、水洗選別したところ骨片を検出した住居址 (第10・11号住居址) が認められた。

#### 4) 中・近世の遺構と遺物

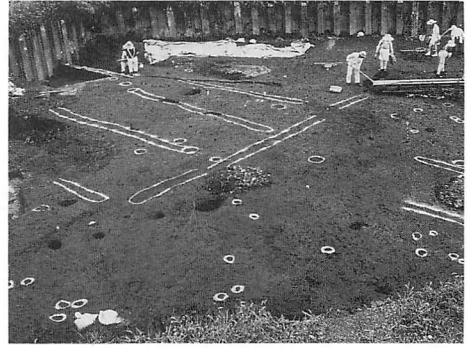
第1面では溝が確認されている (第12図)。第2号溝 (SD002) は幅1.5m、深さ1mを測り、南北方向に走る溝 (Pl. 17) である



Pl. 11 II区平安時代調査区南側遺構配置



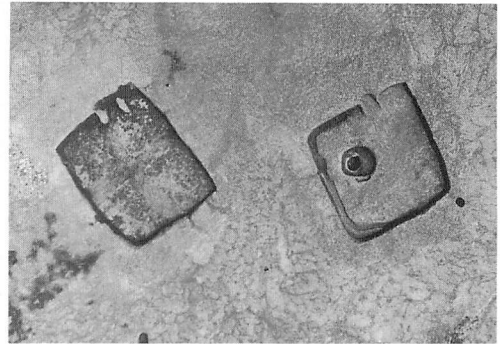
Pl. 12 第7号住居址



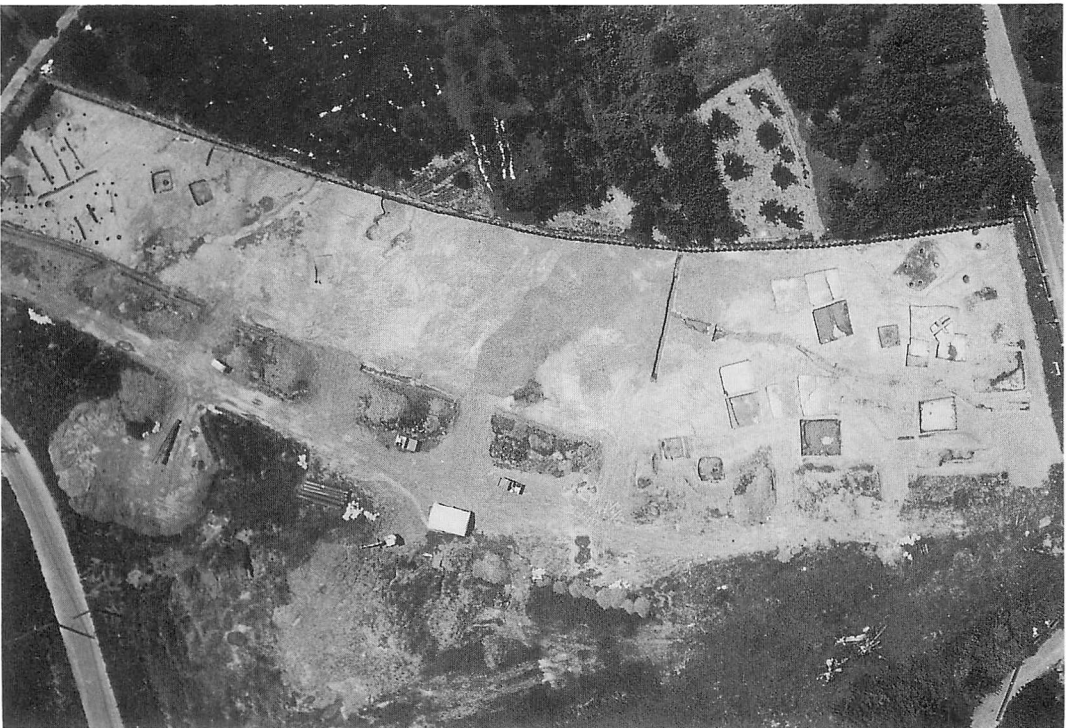
Pl. 13 平安時代（第2面）調査風景



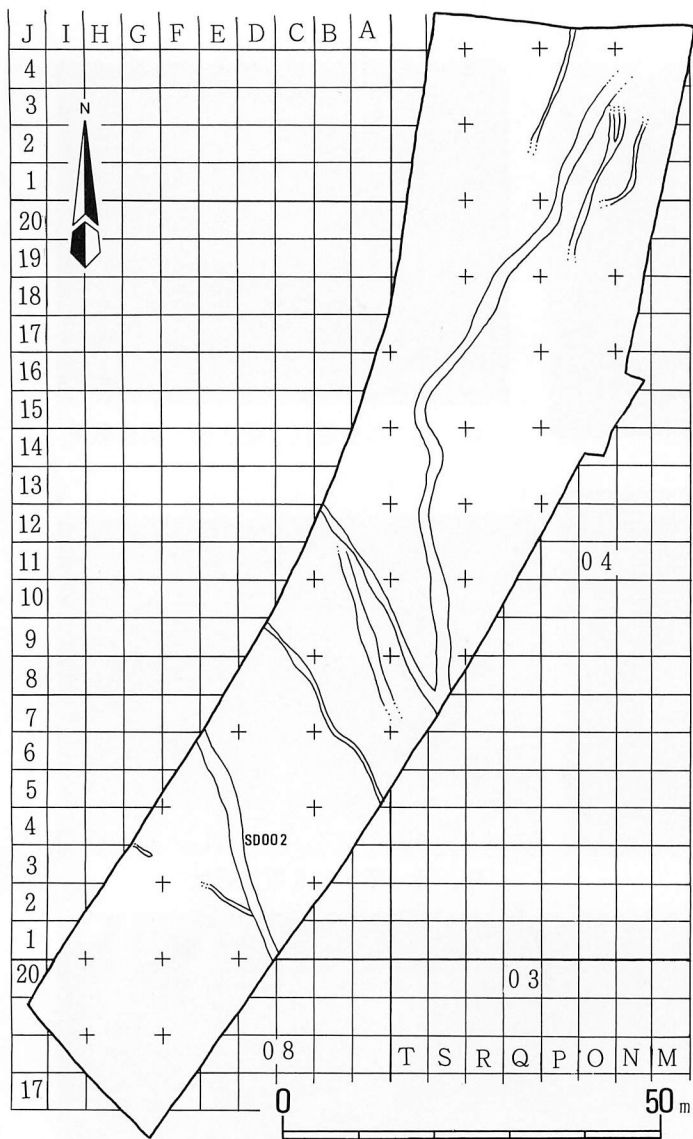
Pl. 14 第8号住居址



Pl. 15 第7・8号住居址



Pl. 16 II区平安時代（第2面）調査区全景



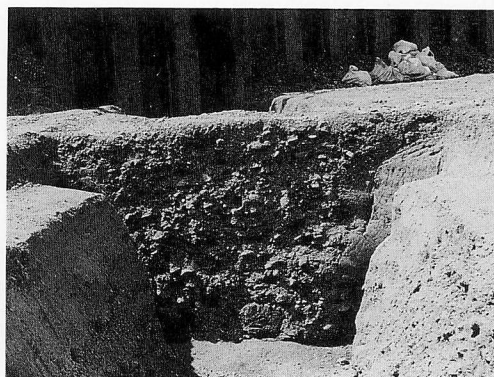
第12図 中・近世（第1面）遺構配置図（1/1000）

が覆土には砂礫が堆積しており、本址が埋没する過程で御勅使川氾濫の影響を受けたことを想起させる（Pl. 18）。他の溝でも第2号溝同様掘り方のしっかりしたものには同様の堆積状況が観察できた。溝からは弥生時代から近世に至る土器・土師器・陶磁器の破片が僅かに出土しているのみで、時期を明確にできない。現段階では調査区南側で確認された層序に基づき、中・近世以降という大枠でその時期を捉えておきたい。

（三田村美彦）



Pl. 17 第2号溝全景



Pl. 18 第2号溝東西セクション



## 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	中山誠二（山梨県埋蔵文化財センター主任文化財主事） 小林公治（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事） 三田村美彦（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事） 佐野和規（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）
作業員・整理員	秋山悦子、秋山昭二、秋山長平、秋山みずゑ、秋山よし子、芦沢留市、芦沢ひろ江、芦沢八千子、芦沢よし子、飯室菊美、石井関造、石川茂子、石川房男、井上文一、井上正子、上田重喜、内田修一、鰻池定一、大森朝市、大森ユキエ、大森玲子、小野嘉雄、河西武子、河住照雄、河住ふさ子、河野トク、斉藤いつ子、佐久間篤子、桜林豊、佐塚金作、佐塚トラヨ、鮫田進、鮫田博重、沢登きぬ子、沢登タツエ、志鎌紀子、杉田一雄、鈴木みつ子、仙洞田しづえ、立川なつじ、千野ふみよ、千野良男、内藤孝子、内藤春江、名取清子、浜辺きみ子、原田佳子、樋口しげ子、平出恭代、深沢照明、深沢朋次郎、深沢初江、深沢はる、深沢貢、保坂よし、保坂よ志美、堀内婦志江、松井俊雄、望月厚子、望月いよ子、望月里子、望月利雄、望月とめ子、安原敏夫、依田成美、若菜永子、渡部さつみ、渡辺洋子
協力者・機関	櫛形町教育委員会、若草町教育委員会

## 報告書概要

フリガナ	ムラマエヒガシアイセキ		
書名	村前東A遺跡概報1		
副題	一般国道52号（甲西道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（Ⅰ区・Ⅱ区）		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第90集		
著者名	中山誠二・小林公治・三田村美彦・佐野和規		
発行者	山梨県教育委員会 建設省甲府工事事務所		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 Ⅷ 0552-66-3881		
印刷所	ヨネヤ印刷		
印刷日・発行日	1994（平成6）年3月22日・3月30日		
ムラマエヒガシ 村前東A遺跡	所在地	山梨県中巨摩郡櫛形町十五所	
	25000分の1 地図名・位置・標高	小笠原	北緯35°37′ 東経138°29′ 標高280m
概要	主な時代	Ⅰ区：古墳時代前期、平安時代 Ⅱ区：弥生時代後期、平安時代、中近世以降	
	主な遺構	Ⅰ区：古墳時代一埋没旧河道、焼土址11基、ピット群 平安時代一住居址12軒、畠状遺構2ヶ所、溝 Ⅱ区：弥生時代住居址5軒 平安時代一住居址9軒、溝 中近世以降一溝	
	主な遺物	Ⅰ区：古墳時代一土器、鉄製品、石器 平安時代一土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、墨書・刻書土器、炭化種子 Ⅱ区：弥生土器、平安時代一土師器、須恵器、炭化種子、動物骨 中近世一陶磁器、かわらけ	
	特殊遺構	特になし	
要	特殊遺物		
	調査期間	1993年4月12日～12月27日	



山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第90集

1994年3月22日 印刷  
1994年3月30日 発行

むらまえひがし  
**村前東A遺跡概報1**

一般国道52号（甲西道路）改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査（Ⅰ区・Ⅱ区）

編集 山梨県埋蔵文化財センター  
山梨県東八代郡中道町下曾根923  
TEL 0552-66-3881

発行 山梨県教育委員会  
建設省甲府工事事務所

印刷 合資会社 ヨネヤ印刷